

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 末松 美咲

論 文 題 目 絵ものがたりの形成と再創造

### 論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 阿部 泰郎

委員 名古屋大学教授 佐々木 重洋

委員 名古屋大学教授 塩村 耕

委員 名古屋大学准教授 近本 謙介

委員 慶應義塾大学教授 石川 透

## 論文審査の結果の要旨

### [本論文の概要]

絵本や絵巻の形態をとる物語テキストを「絵ものがたり」と呼び、それが形成される過程と、その過程における物語再創造の方法について解明することを目的とする。特に、室町時代を中心として、十四世紀半ばから十七世紀後半の約三百年間に作られた短編の物語草子である御伽草子作品を対象として、テキストの分析と解釈に基づいて考察する。

第一部は、室町期の絵巻『稚児今参り物語』を対象として、物語が各テキストによって変容する様相について論ずる。第一章では、『稚児今参り物語』諸本のうち、細見実氏旧蔵彩色絵巻を取り上げ、天狗の描写に焦点を当て、詞書・挿絵・画中詞を分析することによって彩色絵巻の特質について指摘した。第二章では、新出本である甲子園学院蔵白描絵巻を扱い、彩色との比較から、白描絵巻の本文が王朝物語としての特徴を持つことを示すとともに、その特徴が増補されたものであることを証明する。その上で、伝承筆者である後土御門院勾当内侍を手がかりとして、増補系本文の制作と中世後期の女房文化との関わりを述べる。

続く第二部においては、御伽草子と先行説話、同時代作品との関係性に焦点を当て、物語を形成するイメージと物語の型という観点から論ずる。第三章では、御伽草子『和泉式部』が、先行説話における式部像を引きながら、『誓願寺縁起』など式部の発心譚の拡がりを受けて成立した物語であることを考察する。さらに、丹緑本では本文の細かな改変によって、『和泉式部』の女人救済という主題を強調していることを述べる。また第四章は、御伽草子『花みつ月みつ』を対象として、物語の型が一致する説経節『目連記』前段や、談義から派生した『源海上人伝記』との比較を通して、『花みつ月みつ』がふたつの物語と共通する型を持ちながら新趣向を取り入れ、新しい物語として成立する過程について考察する。その上で、『花みつ月みつ』を舞台である書写山円教寺の童子説話のなかに位置付ける。

第三部は、絵草紙屋「小泉」の印記を持つ勝興寺蔵奈良絵本『硯わり』を中心として、奈良絵本を商品として扱った絵草紙屋を取り上げ、近世前期における物語制作の方法について考察する。第五章は、『硯わり』諸本のうち新出の勝興寺本を含む加藤家本系統の本文を分析する。加藤家本『硯わり』は、『元亨釈書』を骨組みとし、そこに『撰集抄』を中心とした諸説話を組み合わせて作成された物語であるが、性空伝を軸としながら、説話を有機的に結び付けていく物語化の方法を、近世前期の物語制作の典型として提示する。続く第六章では、勝興寺本と加藤家本の本文、挿絵、装丁を比較分析した上で、体裁の異なる加藤家本と勝興寺本の本文と挿絵の原本が共通すると考えられることから、絵草紙屋間におけるテキストの共有について指摘する。第七章は、絵草紙屋「小泉」の奈良絵本制作を軸に、同じ「小泉」の印記を持つ慶應義塾図書館蔵『七草ひめ』と比較することによって、勝興寺蔵『硯わり』の制作から伝来までを考察し、豪華本としての形態に合わせて本文の増補が行われた可能性を論じている。

## 論文審査の結果の要旨

### [本論文の評価]

「御伽草子」と通称される室町時代から江戸時代にかけて大量に生み出された物語テキストは、その多くが絵巻や絵本の形態をもつ、絵と不可分な文芸メディアであった。本論文は、これを「絵ものがたり」という包括的概念の許に認識し、その絵と共に物語が絶えずあらたに形成され、展開していくテキストの動態を、積極的な再創造として、制作者の本作りの営為の過程から見いだそうと試みた。このアプローチにより、日本の文芸作品の中でも殊に注目すべき文化遺産である前近代の絵巻・絵本の意義と価値を探り出そうとする、意欲的な研究たり得ている。

研究対象に選ばれたのは、まず室町宮廷の周辺で創られた、王朝物語の流れを汲む『児今参り』であり、その彩色と白描小絵の対照的な絵巻遺品の比較から、前者に対して後者が、『源氏物語』等の王朝古典による趣向を加味した高度な文芸化を加上する創意を摘出したことは、新見として大いに評価される。次に、『和泉式部』の民俗神話的な母子相姦伝承が、御伽草子の原型において書写山性空の許への発心遁世譚へと、唱導を介した宗教物語へ展開したこと、更に、書写山を舞台とした『花みつ月みつ』や『硯破』など、稚児の自己犠牲や身代りによる発心遁世譚が、共通する中世の談義唱導や語り物との比較によって、絵入りの物語草子としての達成が明瞭にうかびあがることになった。特に『硯破』は、児の犠牲により発心したのが性空となったという、『撰集抄』にもとづく書写山開基の性空上人伝の物語化に至るのだが、その絵巻から絵本へと展開する諸本間の比較を通じて、各テキストのきわめて創造的な展開の様相がうかびあがった。特に、「絵草紙屋小泉」印を有す『硯破』新出伝本の精細な分析による、二系統に岐れた本物語の独自の創意と絵と呼応する物語形成の具体相の究明は、まさに「絵ものがたり制作工房」の機構に迫った成果として注目し価値を認める。加えて、書写山および性空という宗教伝承圏の系譜の一端を明らかにしたという点でも、研究史の上で確かな成果を加えたものとして評価されよう。

ただし、絶好の資料に恵まれ、独自の論点を確保しながら、その具体的な取り組みと論述においては、絵巻の画中詞を含めた、絵の位相について相関する物語のテキスト分析や議論が欠如していることをはじめとして、必ずしも周到な検討がなされているとは言い難い。書写山と性空という巨大な宗教伝承圏のパースペクティブにも目配りが及んでいない憾みが残る。しかし、これらは何れも、本論を基盤とした今後の研究の進展のなかで、自ずと克服される課題であろう。何より、従来の日本文学・文化研究に「絵ものがたり」という斬新な領域を開拓した、挑戦的な研究であり、土台となった業績の大半が国際共同研究により構築された、高い国際性も備えた成果として、審査員一同、全員が一致して、博士（文学）学位にふさわしい論文と判断した。

別紙2

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	末松 美咲
試験担当者	主査	名古屋大学教授	阿部 泰郎	
	委員	名古屋大学教授	佐々木 重洋	
	委員	名古屋大学教授	塩村 耕	
	委員	名古屋大学准教授	近本 謙介	
	委員	慶應義塾大学教授	石川 透	
(試験の結果の要旨)				
<p>名古屋大学文学研究科（課程博士）審査内規約第5条および第6条にもとづき、平成29年11月27日午後5時より2時間にわたり、人文学研究科130会議室において、試験担当者一同、申請者に面接し、論文内容および専門分野における研究能力について口頭試問を行った結果、申請者は合格と認められた。</p>				